



中納良恵 × 稲葉俊郎 × 坂口恭平

創作の秘密に近いところ / 芸術・夢・医療

中納良恵が、今、いちばん会いたい男たち—西洋医学だけでなく、伝統医療、補完代替医療、民間医療に深い知見があり、伝統芸能に詳しい医師の稲葉俊郎。そして、新政府内閣総理大臣にして建築家、小説家、画家、音楽家である坂口恭平。多層的に独自の道を生きる彼らと中納が語り合った、音楽、ものを作ること、そして生きること。たっぷりお届けします！

写真/河西 遼 取材・構成/丹野未雪

対談 中納良恵 × 稲葉俊郎

芸術と医療。一見相容れない二つの分野をつなぐ医師・稲葉俊郎と、親交のある中納が音楽と身体について語り合った。

「情報過多の時代にあって、自分にとって何がいいのか本質を見極めたい」

(中納)

芸術は人の行動を変えてしまう

中納 私の親しい友人に、体のメンテナンスの話とかしてて、その方が稲葉先生の奥さんだった。「夫が西洋医学だけでなく代替医療にも詳しいので、会ってみますか？」と、紹介してもらって以来のお付き合いですね。今日はありがとうございます。

稲葉 いえ、こちらこそ。光栄です。

中納 稲葉先生は東大病院にお勤めですよ。

稲葉 はい。循環器内科で心臓のカテーテル治療をしています。心停止してしまった人のところに駆けつけて、手の血管から0.1ミリぐらいのワイヤーを3ミリの心臓の血管に持っていくという緊急治療です。これを研修医の時から24時間365日体制で続けてきました。

中納 めっちゃハードな仕事ですよ。稲葉先生はそういう現代医療のど真ん中なのに、代替医療にも詳しくて、西洋医学だけじゃない柔軟な視点を持っている。それって型破りやけど本来あるべき姿やなって思うんですけど。

稲葉 意外にいないんですよ。どちらも同じ命に対する仕事なんですけど、西洋医学側は代替医療なんてインチキだと言うし、代替医療側は西洋医学なんて薬漬けだと言って、反目しあっている。僕は共通の土台に立って、体のことを考えていくということを提案をしています。

中納 何がきっかけだったんですか？

稲葉 3.11が大きなきっかけかもしれません。被災地に健康調査のため行ったんですが、まだ遺体が収容されていない時期で、医療器具も治療薬もない、病院そのものすらないという状況でした。「私たちは無力です」と、医師や看護師が言った。でも僕は、医療のプロとしてそれ

はおかしいんじゃないかと思った。と言うのも、僕は山岳部の監督をしていて、ボランティアで山岳診療所を手伝っているんですね。山奥で、医療器具が何もないところでケガや病気になった時、果たして何ができるかというのを実践して、人の心や体の本質的な知恵が必要だと常々考えていた。被災地で無力感にうちひしがれている現場に遭遇して、これまで自分が考えてきたことを発信しようと決めました。

中納 人の心や体の知恵って、もしかしたらすごたくさんあるのに、知られていないっていうか、気づいていないかもしれないですよ。

稲葉 仏教とともに中国医学が、江戸時代には蘭学が、明治維新後にはドイツ医学が、戦後はアメリカによって西洋医学が入ってきたと、僕らは学びましたよね。つまり、日本独自の医学はないとされている。でも、そんなはずはないと医療の歴史を調べていくうちに、日本では「道」といわれる世界が医療的な役割を果たしていたと思い至ったんです。

中納 道？

稲葉 はい。武道、弓道、華道、茶道、書道といった芸道の「道」です。これらの身体技法の中に、心や体に関する知恵がたくさんある。いわゆる邦楽で言えば、雅楽、尺八、三味線なんかの中にもあると思います。今、マインドフルネスや瞑想など、自己啓発とともに流行ってますけど、体の外にあるものに頼るんじゃなく、自分の内なる力で心を安定させる技がすでにあった。書道で墨をするというのも極めて瞑想的だし、僕は能をやっているんですが、単に立つだけ、歩くだけで気が静まる。

中納 なるほど。鎮静剤になる。

稲葉 そうです。それから、僕は文学、絵画、音楽といった芸術にも、極めて医療的な役割が

あると思っています。芸術は人の心を感動させて、行動を変えてしまう。たとえば、自殺しようと思っていた人がある曲を聴いて思いとどまったなら、命を助けたことになる。ある意味、医療よりも効果がある。憂さ晴らしのための音楽もあるかもしれないけど、人間の魂に響くような音楽がもたらすものって何だろう、と。

中納 うん。音楽には力がある。私、さっき入ったお店で、一人の女性に声をかけられたんです。フランスでテロがあった時にちょうど住んでいて、「水中の光」を聴いて救われた、と泣きながら話してくれた。やっててよかったって思います。

稲葉 良恵さんのソロは「内」という感じがします。「濡れない雨」「beautiful island」とか、どこか瞑想的ですよ。

中納 ソロは内省的なんですよ。

稲葉 まるで個室を覗いているような感じです。

中納 個室ですね（笑）。聴いてくれる人に聴いてもらおう、という感じがあるから、結果として自分で自分を癒しているというか。癒すためにもの作りをしているわけではないんですけど。ソロの曲作りやレコーディングの時は、私やさしいですよ。旦那とも全然喧嘩せえへんし（笑）。

稲葉 同じことをドイツの児童文学作家のミヒャエル・エンデが言っています。エンデがなぜ童話を作るのかというと、自己治癒的な働きもあり、かつそれが副次的に誰かの心にも同じ治癒をもたらすからだ。

中納 その作り手が受けた効果が、聴く人にも同じ効果をもたらす。

稲葉 ええ、秘儀のように込められている。芸術、あるいは現代医療において忘れてはならないことだと思います。ただ、音楽が人の体に与えるものという話になると、どうしても聴覚的なことばかりになるのが僕は不満なんです。

中納 なぜですか？

稲葉 もちろん、耳で聴いて脳で情報処理をするわけですが、でも音って本来振動だから、皮膚感覚が重要じゃないかと思っていて。ヘッドフォンばかりで聴いていると、脳の中だけで完結するものになってしまいがちで、それは危うい。生で聴いたり自分で演奏したりして、皮膚感覚を使うのがいいんじゃないかと思っているんです。

中納 体ごと音楽に触れるということですよ。

稲葉 そうです。ところで、人体は60兆個の細胞の調和で生きているといわれるんですが、そのうち脳細胞はいくつあると思いますか？

中納 ……40兆個？

稲葉 大脳だけだと約200億個です。

中納 ええー！

稲葉 脊髄や末梢神経など、全部入れると約2000億個です。

中納 めっちゃ少ないじゃないですか。

稲葉 それだけ脳が体を占めているというイメージがあるということなんです。

中納 そりゃ、考え次第で体調が良くも悪くもなるわけですね。

稲葉 ええ。脳と関係なく運営されている59兆数千億個の細胞を、約2000億個の細胞が邪魔をするということも起きる。ニューロン（神経細胞）は地下鉄みたいにネットワーク化しているから情報処理の速度が速いんですけど、でも、体にしてみたら少数派なんです。

中納 へえー。

稲葉 脳は新参者。内臓だけの生き物のほうが多いですから。だから、聴覚だけで聴くというのは、実は体の一部しか活用していないわけです。僕は皮膚感覚、内臓感覚で聴くほうがより大事なんじゃないかと思う。EGO-WRAPPIN'の音楽は内臓的ですよ。はらわたから来る感じがする。きっと、作り手がそこから発しているから、聴き手が呼応しているんでしょうけど。

原点は、家で一番声が響く場所

中納 たとえば、曲を聴いて、悲しい、懐かしいとか、感情が呼び起こされますよね。それってどういうことなんですか？

稲葉 「感覚」と「知覚」は違うんです。たとえば今、室内にいて、空気が皮膚に接していますよね。これは「感覚」なんです。ドアからすきま風が入ってきたりして「皮膚が空気に接している」と意識に上ってくるのが「知覚」。通常、私たちは「皮膚は空気に接している」と「感覚」はしているけど「知覚」していません。

中納 わざわざ意識しないと上がってこない。

稲葉 そこが大きな違いなんです。僕らが「感覚」として五感で受け取っているのと、認識し

て「知覚」するのとは、まったく違う話。「感覚」のほうが大きいわけです。感情が呼び起こされる、言い換えると、古い感情に訴えかけてくるものは、普段意識していないんだけど、何か、その場の空気感とか風景といったものによって「知覚」まで上がってくることがある。子供の頃、里山や川を見た時に感じていたものが、ある音楽によってよみがえる、というような。

中納 そういうことありますね。

稲葉 いろんなイメージがわいてきたりとかね。突然わき起こってくるものって、実はすごく古い記憶、人間を支えている何かに作用している。

中納 ビートルズとか、何回もリマスタリングされてるじゃないですか。昔の音は波形がちゃんと波打っているんですけど、最近のは音圧がビシーッと太くて一定。音のボリュームがすごく大きくなってきてるみたいで。

稲葉 強い刺激が求められているんですね。

中納 レコーディングでも、パソコン上で音を切り貼りしたりする作業が増えたと思うんですけど、それは音楽を目で判断しているというか。感じる部分が変わってきているという気がするんですよ。エンジニアが「この作業も100年後には超アナログですよ」って言ってて。今、超デジタルって思ってることが、100年後にアナログになるとか想像もつかない。でも、体を使ってやることって、もしかしたらずっと残っているかもしれないですね。

稲葉 アナログレコードは、針を落とした時のパチパチパチとした音とか、プレーヤーの前で正座して聴く感じとか、茶道みたいですよ。

中納 曲が終わったら針を戻す。自分が動いて終わらせなアカンし。

稲葉 そう、身体的なもの。現代では、ライブやフェスに行く人が増えていたり、身体性に回帰しているのかなって思います。その空間の熱気を感じて音を聴くことの大切さが再確認されている。EGO-WRAPPIN'のライブってすごいなと思いますよ。バンドの音が鳴って、良恵さんがステージに出てくると、一気に空間が変わる。鳥肌が立つ。まさに皮膚で感じている。

中納 聴き手と交流しているな、一方通行じゃないなというのは感じますね。

稲葉 生きているもの同士の交流がある。原点に帰ることが大事かもしれないですね。なぜ人類は音楽を生み出したのか、そこへ立ち返って



いけば、本質から大きく逸れることはないと思うんです。それは医療にも言えることなんですけど。そう言えば、良恵さんはおばあちゃんの前で歌ったことが原点だと言っていましたね。

中納 そうです、原点ですね。おばあちゃんが喜んでくれるから歌ってた。家で一番声が響く階段の踊り場まで呼ぶんです、来てー！って。兄弟で『ザ・ベストテン』ごっこもやったり、すごく楽しかった。

稲葉 踊り場で感じた音の響き、目の前の人喜んでくれたうれしさ、楽しさ。過去と現在の良恵さんが、地層のようにつながっている。今のお話を聞けてうれしいです。

中納 今でもライブ前に夢に出てくるんですよ、おばあちゃん。

体は一朝一夕にできたわけじゃない

稲葉 音の影響について、もう少しお話ししてもいいですか。

中納 もちろんです！

稲葉 良恵さんも来てくださった、野村萬斎さんと大友良英さんとのトーク・イベント『MANSAI 解体新書』（2016年7月、世田谷パブリックシアターで開催）でも実験の動画をお見せしながら話しましたが、鉄板の上に乗せた砂が周波数によって模様が異なる。周波数が高くなるにつれ、模様が複雑になる。水も同様で、まるで生き物みたいな動きをする。人間の体も



シンギング・リンで稲葉先生の施術を受ける中納

7割が水ですから、こういうことは人体にも物理的に起こっているわけで、健康や病気にもある意味通じていくのかなど。音や振動が人の体にどのような影響を与えるか、どのように整えられるのか、追求していきたいテーマなんです。

中納 稲葉先生に施術してもらいましたね。

稲葉 「シンギング・リン」を体にあてて直接振動を与え、筋肉を緩めて体を整えるという施術でしたね。体内が滞っていると響きが鈍くなったりする。体の調律みたいなものです。

中納 施術中、体の中に空洞があって、それが広がっていくような感じで。すごく落ち着く音ですよ。もともとこれって何用なんですか？

稲葉 仏具のリンをルーツに、体の調整のために作られたものです。倍音が出やすいよう微妙な曲線になっている。龍村仁監督の映画『ガイアシンフォニー 第六番』にも出てきますよ。

中納 音の響きが武満徹の音楽みたいですね。

稲葉 そう言えば、武満徹はエッセイで水についてよく書いています。たぶん水が音の媒体になっていると言いたいのかもしれません。

中納 稲葉先生と話していると、情報過多の時代にあって、自分にとって何がいいのか本質を見極めることが大事だなとあらためて思う。

稲葉 身長も体重も姿かたちも、人の体は一人ひとり違う。何が一番心地いいのか、自分自身と対話してほしい。家族も恋人もちろん大事なんですけど、自分の体は生まれてから死ぬまですっと一緒にいる存在。人にはありがとうと

言えるのに、自分の体には感謝していなかったりする。僕は2~3歳の頃、重症病棟に入院して一度死にかけているだけに、より強く、自分の体のおかげだなんてわき上がってくるのかもしれませんが、でも誰にとっても言えることだと思う。病気だけでなく天災や事故とか、いつどうなるか分からないところに常に自分の生命はあるし、それでも生きていくわけです。

中納 何で生きてるんでしょう？

稲葉 求められたからじゃないですか。生きてほしいと。多細胞生物が海から陸に出てきた生命40億年の歴史が、人間の体すべてにあるんですよ。僕たちの体は一朝一夕にできたわけじゃない。それに、体の仕組みなんて99.9%わかっていない。わけもわからずとにかく動いて生きている。でも、そのわけがわからないものに生かされているわけですから。

中納 うん。大事にしないと。

稲葉 僕ね、音楽をやっている方々が心身を壊してまで作品を作るのは、悲しいんです。その人本来のチューニングで音を届けてほしい。「体調悪そうだな」とか、ファンはすぐわかりますよ。

中納 はい、すみません！ あの、言い訳じゃないんですけど、ライブのあと、興奮して眠れなかったり、2日間ぐらいハイテンションだったり、朝まで飲んでしまう時があって。最近はお酒とかでリラックスするようにしています。

稲葉 お酒で意識を麻痺させるんじゃなく、さっきお話した「道」の知恵を取り入れるとかして、うまく静めてほしいですね。体の気持ちになると大変なんですよ。疲れている時に、肝臓、腎臓がフル稼働しているわけですから。

中納 森くん、最近も朝まで飲んだりしてますね。いやまあ、元気でいいと思うんですけど。

稲葉 人間の体って思っている以上に丈夫にできていて甘えてしまいがちですが、大切にしてほしい。そのために、僕ら医者はいくらでもお手伝いしたいと思っています。

稲葉俊郎 (いなば・としろう)

1979年熊本県生まれ。医師。東京大学医学部附属病院循環器内科 助教、医学博士。西洋医学だけではなく伝統医療、補完代替医療なども広く学ぶ。未来の医療の土壌づくりのため、未来医療研究会、医心方勉強会、民俗学映像上映会などを主催・企画し、伝統芸能、芸術、民俗学、食や農など、あらゆる分野との創発を探る対話を積極的に行なっている。

鼎談 中納良恵×坂口恭平×稲葉俊郎

稲葉とは意外にも地元・熊本高校の同級生だった坂口恭平を迎え、対話はさらに創作の源泉へと向かう。

「全然うまくできへんけど、何かが少しでも出てきた時には、回路っていうか通路が開いてる」（中納）

「俺、今、美しい」

坂口 良恵さんと初めて会ったのは、たしか大阪のスタンダードブックストアでのトーク・イベントでしたっけ？

中納 そう。坂口くんの『独立国家のつくりかた』を読んで行った。本もトークも面白くて。

稲葉 雑誌の『ユリイカ 総特集 坂口恭平』に、良恵さんがエッセイを寄せていたよね。「魔法使いからの贈り物」というタイトル。僕はそれを読んで、熊本高校の同級生だった坂口くんが、良恵さんにつながっているんだと知ってびっくりした。

中納 二人は同級生やったんやね。

坂口 医者になった稲葉とこうして会うなんてね。いろいろやってるけど、俺ね、音楽家になりたかった。でも、ギターのテクニックを高めよう、って思っても変なセンサーが働いて、うわーって混乱しちゃってできないの。

中納 でもさ、絵は毎日何十枚も描いたりしてるじゃん？

坂口 何を作るのでも時間だけ決めてる。小説なら2時間、絵は1時間。

中納 どこで「あ、これはもう終わり」ってわかるの？

坂口 飽きるまで。それも2分くらいだけど。

稲葉 時間を決めてできるのがえらいよ。良恵さんも絵を描いてますよね。

中納 全然何も決めないで描いてる。色のにじみを見てるだけで楽しい。

坂口 俺の場合、何かを作ることが現実とのぎりぎりの接点なんじゃないかな。そうしないと家ではサンド・オブ・キャッスル状態（笑）。哲学者のドゥルーズが、「文学とは錯乱／一つの健康の企て」って言うてるんだけど、それが

本当によくわかるっていうかさ。健康でいるために作っているし、作れていれば健康。そうしないと危ないわけ、いろんな「トンネル」が待っているから。声はいっぱい聞こえるけど、顔が見えないやつが近くにいるとか……双極性障害の症状自慢になってきた（笑）。

稲葉 語っていること自体が治療的な行為になってると思う。

坂口 そう、臨床になってる。喋ることが音楽を鳴らしていることでもある。それに比べると、歌が生まれる瞬間ってなんて美しいんだろうね。

中納 「俺、今、美しい」っていう自覚がある？

坂口 うん。あの瞬間だけはたまらない。文章を書くのとも、絵を描くのとも違う。

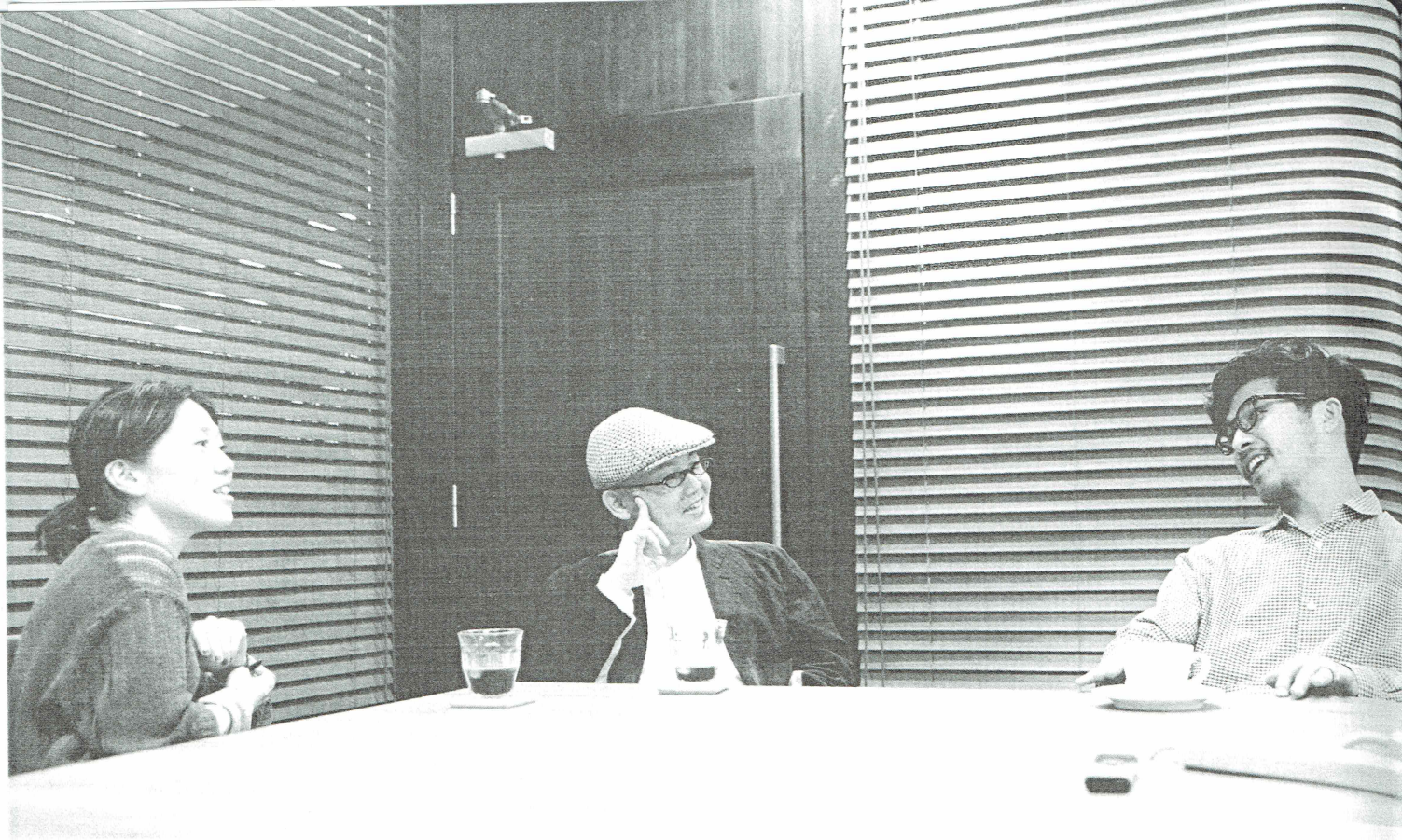
中納 坂口くんの歌詞、すごい。美しい言葉を使ってるよね。浮かんでくる風景もきれいな。

坂口 メロディーと歌詞が、だいたい同じ瞬間に出てくるんだろうね。落ち着いて聴くと、なんてセンチメンタルな曲だと思うよ。超素直な時に出てくるものだからかもしれない。でも、自分のことを芸術家だとは思えないね。

稲葉 ネイティブな芸術家って感じだけどね。

中納 そうそう。坂口くんは作品を作り続けることが任務っていうか。もし止めようって思ったらさ……。

坂口 それ、死に直結してるから。「キツイ時は文章でいこう」「書くのがつらいなら絵を描け」とか、俺が過去残した文章とかビデオメッセージで、どうすれば生き延びられるかを今の俺に教えてるの。精神科医の斎藤環さんは「感情の記憶だけがない」って言うてるけどね。本当にみんな、どうやって生きてんの？ こうやって話していれば楽しいんだけど、一人でいるとピノキオみたいなよ。



中納 ピノキオ！ めっちゃかわいい。

坂口 霊長類学者の山極寿一先生は、「坂口くんはゴリラ」って言うんだけど。俺の場合、経験が蓄積されないから実感がない。「どうやったら人間になれるんですか」という気持ち。まるで人工知能、AIみたい。最近は、「充実感とは、やった一飲みに行こうか！というような状態のことだよな」とか理解するようにしてる。

稲葉 高校時代は普通にできてたよね。

坂口 うん。18歳くらいで発症というか、クライシスが来て。

稲葉 創作活動によって社会につながり認められていて、かつ、創作物が素晴らしい作品になってるじゃない？

坂口 最近ギリギリなものが出てきて、受け入れられるか心配だったけど、面白いって反応があったからいいかな、って。

稲葉 坂口くんの後ろ姿は、同じ病気で苦しんでいる人に勇気を与えていると思うよ。

音楽でしか進めない道

坂口 どうですか、EGO-WRAPPIN' 結成 20 年を迎えて。

中納 私一人じゃないからこそ、できることがたくさんあるなって。

坂口 歌いたくない時とか、ないの？

中納 声つぶした時以外はないかな。

坂口 同じことを話すことはできないけど、同じ歌を歌えるって、結構すごくない？ 歌うっていうのは、メロディーも歌詞も決まってるから、その時の時間をもう一度繰り返すことなわけだけど、違う時間として出せる。

稲葉 良恵さんは作る時の困難みたいなものはないの？

中納 ありますよ。そういう時は、お風呂入ったり、寝たりします。

坂口 作ろうと思って作る？

中納 うん。20年ぐらいやってきてわかったのが、「全然うまくできへんけど、こういうのはどうかな？」って何かが少しでも出てきた時には、回路っていうか通路みたいなものが開いてる。

稲葉 多少なりとも何かが出てくるときは、必ずできるという。

中納 そう。今までそうやってできたという経験があるから、このへんまで来たら絶対作れるっていう感覚がある。だから、その時はいいと思わなくてもとりあえず出してみる。

稲葉 お蔵入りするものもあるんですか？

中納 ありますね。

稲葉 しばらく経って聴き直してみたら、いいと思うものとかあるんじゃないですか？

中納 いや、もう忘れます。

坂口 俺、作ったもの全部が作品。

中納 坂口くんはとにかく常に何かが出てくる。

坂口 カチッとサウンドプロダクションした音源を作ってみたくて、ZAKさんに電話したりするんです。でも、「おはようございまーす」ってスタジオに行くだけで、俺、倒れると思う。周りの人が全員アフリカ人だったらできると思う。

中納 どういうこと？

坂口 2007年にケニアのナイロビに行ったんですよ。キベラっていうスラム街にいたんだけど、バーで踊っていたらエレキギターを渡されて、ステージでギターを弾いて歌ったの。「Where are you from?」って聞かれて、「Kumamoto」と答えたら、「Me too, me too」って言われた。「熊本」はスワヒリ語で「hot pussy」って意味なの。その騒ぎが忘れられない。俺、適切なことがしたいんだろうね。でも、読者がいたり、パトロンがいたり、受け皿があるのが興味深いよね。

稲葉 社会の枠組みがガチガチだから、坂口くんみたいに自由に生きる存在が求められているんじゃないかな。

坂口 俺、固定観念すごいよ。右に行きなさいって言われたら、絶対行っちゃう。

稲葉 それは固定観念じゃなくて、素直なんだよ(笑)。落ち着くんなら、アフリカでレコーディングすればいいよ。

坂口 それはいいかもしれない！ 今ね、元気がないところから元気なほうへ、少しずつ階段を上っている感じなの。この過程がちょっと音楽っぽい。自己啓発とかの前向きな言葉とかじゃ進めない、音楽でしか進めない道がある。論理的にこうすればいいと示されても、そんなんじゃないっす、みたいな。

稲葉 文章があって、絵があって、音楽があって。表現を循環しながら浮上してるのかもね。

坂口 アンリ・ミショーは詩人でありながら絵も描く。ウィリアム・バロウズに小説のカット・アップを教えたブライアン・ガイシンは、絵を描くように文章を書いて、文章を書くように絵を描く。この二人が最近気になってる。

稲葉 専門分化していく前の状態にいたい？

坂口 そうね。職業以前のものにずっと関心があるし。まあ、変なおじさんみたいな感じだね！ いろいろ作ったり、祭りの時だけ出てきたり。

稲葉 そういう人、昔は多かったよね。民藝では、日常の暮らしに美を見出だして、無名の

人たちが評価と関係なく作ってきたものがあるよね？ そうした歴史を坂口くんは背負ってる気がする。

坂口 平賀源内とか、レオナルド・ダ・ヴィンチもそうだけど、分野が多岐すぎて何やってるかよくわかんない人がいる。俺は彼らの多少劣化版なのかもしれない。俺さ、CDとかも、アウトテイク集ばかり買っちゃうのよ。ジミヘンが一人で宅録してるやつとか。

中納 へえー。そういうのが響くの？

坂口 うん。トーキング・ヘッズもアウトテイク集がいい。マーク・ボランも絶対アコギ。でも、自分の本はマスターテープまで仕上げる。編集者から言われるの、「お前の初稿が一番面白いんだけどな。恭平、サウンドプロダクションして、ちゃんと本出そう」って。きちんと校正作業するんだけど、本当は「文字の絵」で見せたい。ひとつの抽象画みたいなつもりで文章っていうか文字を書いているから、俺の初稿、改行がないの。

中納 坂口くんのアウトテイク見たいな。そういうのって出されへんのかな。

坂口 実験みたいな感じだよ。文法もめちゃくちゃだからね。

稲葉 作品になる一步手前の状態なんだね。時代が追いついてくるんじゃない？

坂口 MTRで録音しては前野健太に送ってて。マエケンが「これ、死後発掘されるテープだから」って言うんだけど、その言葉がうれしかった。

僕らは夢の世界についてわかってない

稲葉 良恵さんも、荒削りしたものを彫刻するみたいに整えていくんですか？

中納 EGO-WRAPPIN'の場合は、森くんがギター弾いてるところに私が歌をのせていく。その荒削りのところから、「いいやん」って思えるほうに、だんだん整えていく感じ。

稲葉 坂口くんの場合は、荒削りのところで完成なんだね。

坂口 そうね！ 全部ワンテイクだもん。

中納 それって、始めから最後までの流れが、ちゃんとできてるってことじゃん。私ら荒削りの時は、まだ形とは言えない。坂口くんの曲、森くんに聴かせたら、「うわーっ」って言って

たし、わかる人にはわかる。

坂口 もう、ヘタレですよ。今の俺の気持ちは、20歳ぐらいで音楽を聴いてぶっとんでいた時と近いんだよね。デヴィッド・バーンが復刻したシュギー・オーティスとか、アーサー・ラッセルを聴いて、なんやこれとは驚いた時の気持ち。もっと言えば、高校生の時に『ホワイト・アルバム』を聴いた時の新鮮な気持ち。音楽仲間がほしいんですよ。でも結局一人でしか作れないし。ダニエル・ジョンストン状態だよ。まあ、同じ病気だしな。良恵さん、今度一緒にやりましょうかね？

中納 やりたいです！

坂口 BIBIOとか聴くとサンプラー使いたくなるけど、俺、パキパキした音質、ハイレゾとか、だめなんだよね。ダビングした音が好き。20歳ぐらいの頃ずーっと聴いてたのは、マリのラジオ放送を録音したテープなの。いつもアルジェリアに行ってる友達を送ってくれて。犬が吠える声、バイクが通り過ぎる音がしたりするから、おそらくそのラジオ放送は路上でやってる。放送中に電話で出演する人とかがいて、たぶん相手はDJの友達で、掛け合いみたいな会話に上乘せするようにして曲がかかる。それがすごくいいの！この気持ちをどうにか言語化して人に伝えたい、って当時ずっと思ってた。音楽が一番言葉にできない。肉体的には非常に素早い反応をするのにね。

稲葉 音って、まず脳じゃなくて皮膚が最初に反応するからね。

坂口 そっちを信用してるんだろうね。

稲葉 医療に携わっている立場から言うと、坂口くんは現実が夢みたいな状態になっている。普通、目が覚めている時、人は意識水準が高いんだけど、坂口くんは起きているのに低い状態にある。つまり、僕らが夢を見ている状態で日々生きている。でもこれは、創作の秘密に近いところだと思うけどね。

坂口 夢と言え、妙な話があって。『独立国家のつくりかた』を読んで電話してきたモンゴル人がいた。彼の曾じいさんが俺の夢を見て、同じ言葉を使っているやつがいるから探してこいという使命を持って、遊牧民の集落から日本へやって来て、日本語学校に通いながら探していたんだって。「兄貴、お前だった」って言われた。「勘弁してくださいよ」って答えたんだけど。

稲葉 僕のところにも、夢の中で「日本の稲葉というやつに渡しに行け」と言われたと、遠くヒマラヤからアロマの原液を持って来た人がいる。夢とともに生きてる人は、夢に基づいた行動をするんだよ。インドにも、夢の中でお告げがあった人に会いに行く慣習があったりする。

中納 坂口くん、モンゴルに連れて行かれたん？

坂口 ううん。お告げに興味ないし、行ったら二度と戻れなくなりそうだし。だから小説に書いた。それが『現実宿り』。

中納 そのモンゴル人は帰ったん？

坂口 まだ日本にいる。

中納 ええーっ。でもさ、その人は実際に使命感を持って会いに来てるわけじゃないですか。

稲葉 彼らの夢はある種の現実なんです。意識水準がほとんど夢の世界まで現実世界が下りている人たちからすれば、僕らが夢の世界についてわかってないとも言えるわけで。

坂口 小学校の国語の授業で、「平安時代は現代と違って灯りもほとんどないから、一日の半分が夜。だから夢の歌がいっぱいあるんですよ」って教わった。今と違って夢も現実としてあったんだろうね。

稲葉 室町時代まで、いい夢は「吉夢」といって普通に売り買いされたしね。夢が現実と同等に、文学や音楽、つまり芸術の沃土だった。

坂口 音楽は見えない言葉にできない。捕まえられないところとか、夢に似てる。

稲葉 夢を見ている状態は医療的にも大事。人間という生命システムの中で、どんな人でもこの覚醒と睡眠のサイクルがないと生きられない。やはりここに創作の秘密があると僕は思う。

坂口 親戚の集まりでも、みんなが宇宙人みたいに感じるの。コタツやミカンもほっとするものじゃない。その無機質な感じとか、文字に起こさなきゃって思うんだよね。

中納 坂口くんが次に作るもの、楽しみ。

坂口恭平（さかぐち・きょうへい）

1978年熊本県生まれ。作家、建築家、音楽家、画家、新政府内閣総理大臣、自殺者ゼロ運動家。著書に『TOKYO 0円ハウス 0円生活』『独立国家のつくりかた』『徘徊タクシー』『幼年時代』『現実宿り』ほか多数。2016年に『家族の哲学』で熊日文学賞を受賞。アルバムに『Practice for a Revolution』『新しい花』など。